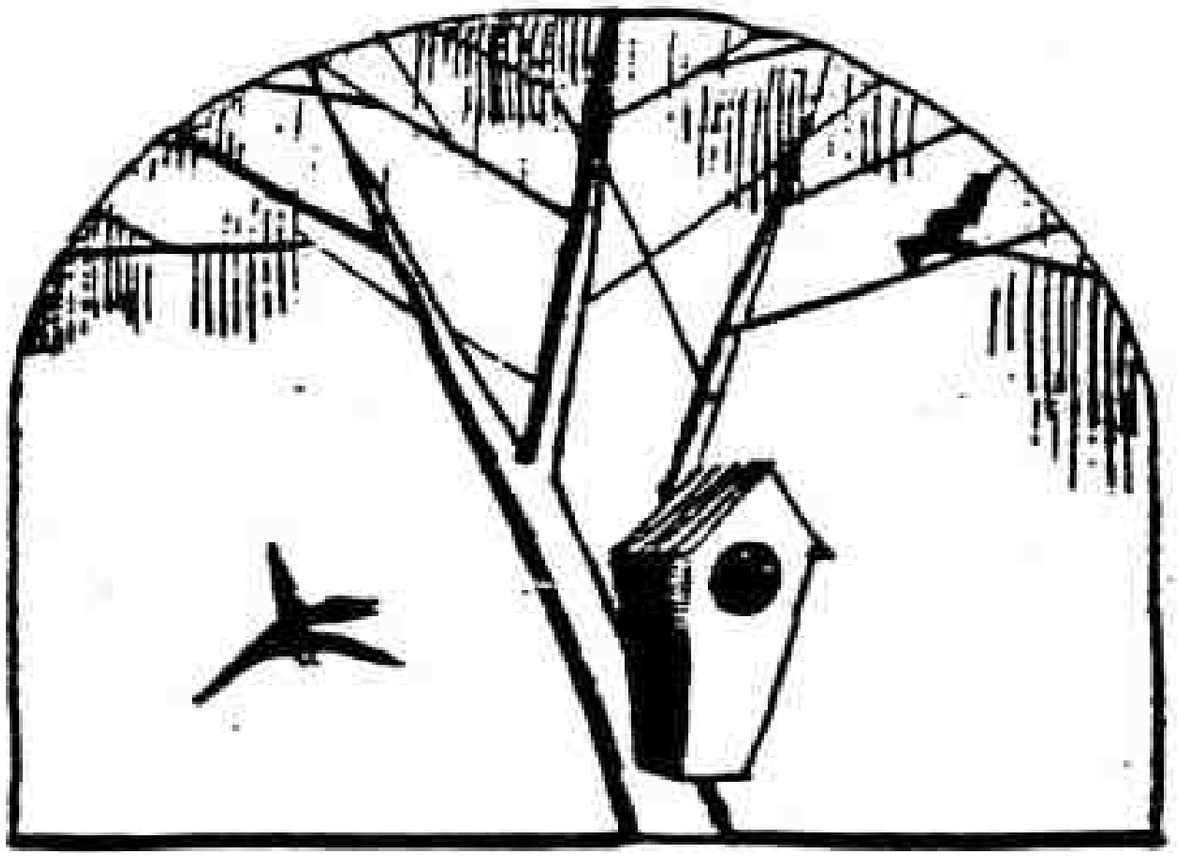
木下川の子ども



1 9 5 7 年 度

～

2 0 0 2 年 度

6年

一

九五七（昭和３２）年度

ヘリコプター

今日はヘリコプターが学校に飛んで来る日だ。皆、朝からそわそわして先生にしかられるが、どうも落着かない。給食も食べ終わってまちきれないように窓にしがみつく。こまかいきりさめが降って運動場が黒々としている。先生の話では一時十分から一時二十分の間だけやってくると言うが、はたしてそんなにきちんと時間通りやってくるものだろうか、と一寸心配だ。ずいぶん長いこと待っていたように思ったが、右からたの校舎の屋根うらからばく音がきこえて来た。どの教室もみんな鈴なりになって一せいに首をのばしかんせいをあげた。やって来た、一年生の教室の上から丸い頭が大きな翼が見えた。学校の上を一回り二回り障子紙をやぶくようなバリバリと言うような大きな音と風が竹のきれはしや、小石をみんなふき飛ばしてしまう。運動上の真中の上に一寸止まったと思う間もなく、先生

と石井君と浅賀君が、かいておいた十五米の円の真中に上手にとまった。エンジンを止めたがまだプロペラがすごい勢いでまわっている。前のガラス玉のようなそうじゅう室から背の高い外国人のような飛行士とめがねをかけた洋服をきた人が丸いつつをもって降りて来た。マイクで運動場に出るように放送されたので大忙ぎで校庭に出た。裏門が開き、近くの工場の人や家の人々がいっぱい入って来た。

それから校長先生のあいさつがすむと僕達の組の浅賀君がマイクの前の日本銀行の人の所へ行った。その人は地面にとどきそうな長い手紙のようなものを読んだが声がきこえない。浅賀君もその手紙をもらう時に何か言ったがちっともきこえなかった。五分間だけ円の所まで近寄ってもよいと先生が言われたので、僕はいそいで丸い頭の前に行った。いろんな機械がピンポン玉のようなガラスばりの外かわからよく見える。ごちゃごちゃといっ

ぱいある。みんな一生けんめいに見ていた。プロペラは、とんぼの翼のようだがもっと長くて今にも廻り出しそうな気がした。

すぐ笛がなって僕たちの組は職員室の前の辺まで後もどりさせられた、かさをさした人もすぼめてうんていの所にかたまっている。

飛行士の人たちがガラス室に入った。

エンジンがすごい音を出し大きな翼がゆっくりと回り出した。一回り二回り三回りと数えている内に数えられない程早くなり一本の棒が廻っているみたいになった。ちょっと機体がうき上がったように見えた。五十センチ位。また下がった。今度は一ペンに一メートル位上った。ちょっと止まって大人の背くらいの高さになった時急に後づさりして、一年生のならんでいる方へ行き出したのであわてて校舎にへばりついたので、一寸こわかった。

が、そのまますうーと高く上り尾をもちあげて、プールの上を軽く飛び越え一回学校の上をまわって、北校舎の上を越えて行った。

教室に帰ってからも窓から見ていたので先生に又しかられた。

一九五八（昭和３３）年度

ゆめ

ぼくは、空をとぶ毛布を発明した。荒川の土手から、東京タワーに向かって出発した。時速一二〇粁のはやさでふっとぶ。数秒間で頂上についた。天ぺんについたら、電波で目がつぶれて何もみえない。仕方がないから、またとんでった。気がついたので磁石を見ると、ずっと南の空にきてしまったらしい。下を見降ろすと　ぞうの群がいる。しかもみえる。ぼくは、とんでもない所にきてしまったとあわてた。はっと思ったしゅん間に、大きな象のせなかにおちてしまった。象の長い鼻がぬうっと、僕の目の前にのびてきた。「だれかたすけてー」といったしゅんかん目がさめてしまった。

一九五九（昭和３４）年度

私のお父さん

家のお父さんは家でいちばんふとっていて、お母さんはせがひくい。

お父さんは この一週間 毎日おそくかってくる。

お母さんと、デパートや、買い物に行ったことはあるけれど お父さんは 毎日おそく帰ってくるのでいけない。

きのうのことだが、夜おそく帰って来て〝おいしそうに〟たばこをすっている。

私は、お父さんに「たばこって そんなにおいしいの」と、聞いたら、こくりと、うなづいた。

このごろ、毎日ざん業がないので早く帰ってくる。

私は、今だとばかりに、「お父さん、今度の日曜、デパートへつれて行って」と言ったら、

「お父さんはね、こんなにふとっているから、

あんまり遠い所へは、行けないから、だめ」と、いった。私はつまんなくなったから、

「じゃあ、映画につれてって」と言ったら、

「すぐあきちゃうから、だめ」と言った。

“私は一度でもいいからお父さんとどこかえ行って見たいなあ”と思った。

ぼくのくせ

一九六〇（昭和３５）年度

先生に、いつもおこられるので、ぼくはそのくせを、なくそうとするのですが、なかなかおりません。後の人がうるさくするのでいつも後を向いてしまうのです。もう一つはいつも消しゴムを上へ投げて、天井にぶつけるのです。すると上から白い物がおちてきます。一度、目に入った時になかなかとれないので、水呑場へ行って目を水で洗ったらやっととれました。目を洗って教室に入った時に、先生にどうしたのかときかれました。ぼくは、

「消しゴムをなげたので、天井から白い物がおちて目に入ってしまいました。」といいました。すると先生はこわい顔をしておこりました。

それからこれも消しゴムを上に投げてとる時に、机をひっくりかえすのです。今も、やって鉛筆を折ったところです。これからは、やらないようにしたい、と思っている。

一

今年する事

去年は絶対しようと思ったことが、ぜんぜんできていない。一月には日記をつけ始めた。しかし、これは、十月ごろまで書いて、後はぜんぜん書いていない。その十月だって書いたり、書かなかったりで、やっと、半分と言う所だ。二月には、私の誕生日があった。その時、「私も十一歳になったのだから、学校の勉強も家のお手伝いも一所懸命にがんばっ

九六一（昭和３６）年度

てしよう。」と思った。しかし、百分の一もできていない。三月は、そんな事もほとんど考えずに遊んでしまった。四月、いよいよ六年になった。その時も二月の誕生日に思ったような事を考えた。しかし、結果は同じだった。ずっと遊んで九月になった。やっと私も、真剣になってきて、何事もしっかりやらなければと思い、勉強の方は日曜日のたびに、予備校へ通ったが、運動会などで休んだし、予備校をあてにして、家で勉強をしなくなった。

また、手芸もレース編を始めたが、買ってきたレース糸がほとんどそのまま残っている。あとは運動会や二十五周年事業の展覧会などがあって、あっという間に十二月になってしまった。

私はこのように、やろうとした事がぜんぜんできないのは、やることが多すぎ、しかも計画を立ててしなかったからではないかと思った。去年の事がこれだけわかったのも、日記をつけていたおかげだが、今年は、重荷に

なるので、日記をつける事は、やめた。レース編なども、夏休みに計画をたててする事にした。しかし、勉強は四月から中学生になるので、どうしてもやらなければならない。家のお手伝いも姉がお嫁に行くので、母を助けたいと思っている。しかし、あまり多くしようとすると、去年のようにできなくなってしまうから、どうしてもやらなければならない必要な事でない限りやらない事にした。そして、やろうとする事は、計画をたてする事にした。できるかどうか、わからないが、学校の勉強と、家のお手伝いだけは今年一年精一ぱいやりたいと思っている。

一九六二（昭和３７）年度

読書感想文「忍術の本」

忍術の本には忍者のもっているものや、服そうが書いてあった。それから、忍術のやり方がたくさん書いてあった。天上をはう術なんかはテレビや映画ではトリックで、ほんと

うにやるには、どうするか、なんかもかいてあった。それは砂に手をさす。そういうふうにして指を強くする、そういうふうにすればできるようになるそうだ。でもほんとうにできるかはわからない、まだやってないもん。

それから忍者が使う術にはたくさんある、火とん、水とん、木とん、金とん、土とん、の五つ。そのほか、きりがくれの術、分身の術がある。そのほかもっとある。ぼくは、忍術の事がすきなのでたいていのをあんきした。

忍者のもっている道具もしってる。忍者のとなえるじゅもんもあんきした。忍者のもっている道具には、忍び刀、手かぎ、くだがき、ぼう手り剣、まんじ、手り剣、うきふみ、水ぐも、もっとたくさんある。使い方もだいたい知っている。でも、水ぐもなんかは、足に水ぐもをつけて水の上をスイスイ、と歩く。ほんとにできるかやってみなけりゃ、わからないだろう。今までにでた忍術の名や忍者のもっているものは、だいたい甲賀流のもので

す。それらはみんな秘伝だそうだ。それから今も生きている甲賀流の忍者がいる。もう年をとっている。その人は？甲賀流、十四世、藤田せい湖。その人が甲賀流忍者の最後だといわれている。それはあとをつぐ人がいないからだ。いくら忍者の子でもなれない時がある。

それは忍者に適した体の人でなければならない。甲賀流十五世大橋健司になりたいな。なれたらいいだろう。それから藤田さんに一ぺん合いたいな。

一

私たちのクラス

私たちのクラスは、いろいろだ。たとえば、私の横のおしとやかで、あまりいろいろな人とつきあわない人、それから、私とおなじ列で、前から五番目の人、この人はひどく短気で、だれかがなにかすると、勉強中でもかまわず、大きな声で先生にいう。それにすぐ席

九六三（昭和３８）年度

を立つ。それからやはり、私とおなじ列で、前から三番目の人、この人も短気でそれになにかあるとすぐ、女の子にやつあたりする。それから私の前の席の人、この人は、私たちのクラスになくてはならない人だ。それは先生だ。それから三の側の、右の前から五番目の人、この人は、ときどき大きな声を出して、みんなをおどろかせる。

それからその人の後ろの人、この人は、あまりおちつきがなく、よく先生にしかられるが、ぜんぜんきにしない。それから、その人がいる列の、さいごに席の人は、すこしかわっていてこのあいだも、ろうかのまん中にすわってしまって、私はしかたなく、左側を通ると、その人は「やりなおし。」と、大きな声でいう。そこで私はしかたなく、やりなおしをする。これだから私が、かき出しに「私たちのクラスはいろいろだ。」と、書いたわけがわかってもらえると思う。それから、これは、十月十四日から同月二十六日までの席の時の作文な

のでことわっておく。

町の将来

一九六四（昭和３９）年度

ぼくは、木下川が将来こういうふうにしたらいいと考えました。

それは、木下川はとても道がごちゃごちゃして、道がわるいので、りっぱにこうさのような道を作ったら便利になるでしょう。

それから、木下川は町全体がよごれていてとてもくさく、よその人がこの町にはいってくると、たいてい「くさい」といわれます。

ぼくたちはそう感じませんが、それは住みなれているせいもあるかもしれません。それでぼくは町をいくつかのくいきにわけて、そのくいきで小型トラックをかい、町の人がこうたいで、そのくいきをまわりごみをあつめて、ごみやき場にもっていくというふうにやればいいと思います。

けれどもやはり一人一人の人が気をつけて町にごみをすてないようにすればとても町がきれいになると思います。

ぼくが木下川の将来について書いたのは、よその人がくるたんびに「くさい、くさい」と、いわれるのがくやしいからです。そこで、木下川の道がわるいということを将来どうしたらなおせるか考えました。

一九六五（昭和４０）年度

兄弟けんか

なかのよい兄弟
なかのわるい兄弟
ねんがらねんじゅうけんかをする兄弟
つまらないもんだ
毎日毎日つまらないことをやる
あきないかな
それともおもしろいのかな
けんかをしてもおもしろ
けんかをしてもお金はくれない

レスラーだけだ
けんかをしてお金をくれるといいな
金はくれない
かわりにげんこつをもらう
おもしろくないけんかだ
兄弟げんかはたまにやればいいんだ
ねんがらねんじゅうやるとつまらない
一週間に一どだけときめればいいんだ
それは無理だ
それはまもれない

いつどこでやるかわからないんだ

それはきまってない

一　私たちのクラス

九六六（昭和４１）年度

私たちのクラスは、とってもゆかいなクラスです。先生は友だちと同じような、かわっている先生です。初めてこの学校に来たのは、四年生のころでした。朝礼台の前に、女の先生と男の先生、そして校長先生が、「四年二組新しく入った先生」といったので、私たちの中で「わははっ」とわらう声が、あちらこちらに、ありました。そのわけは、先生は、ぼうずのような頭のかっこうでした。教室にはいった時でした。先生は、黒板に、兼元辰巳と書きました。そしていろいろな話を、うかがっているうちに、（とってもいい先生だ）と思いました。その日でしたが、私たちの組の、ある子が「あの先生おきょうを、おしえ

てくれるのかな」なんてことが、きこえました。ところが先生は詩のすきな先生で、私たちに、いろいろおしえてくれました。さっそく書いてみました。四年がすぎて、五年生になりました。私たちもなんとなくちょっぴり大きくなったようなきがしました。それにも、先生とは、なかのよいお友達です。詩も小学生新聞に出したりしたこともありました。中でもとてもじょうずな詩を書く子がたくさんいます。そんなことがいろいろつづきました。六年生になった時、私たちは、もう大きなりっぱな、おねえさん、おにいさんなのだから、ちょびひげでもはやしてみたい気持、りっぱな六年生になると、詩もじょうたつし、勉強にもはげまねばならない年です。みんなはりきって、だんだんと大人になる。今でも、この教室は「けらけら」わらっている。いつまでも、いつまでも、この教室には、花がぽっかりさいているだろう。

未来の地球

一九六七（昭和４２）年度

未来の地球は、どのように、なっているのだろう。十年後、百年後、千年後の地球のようす。太平洋には地下トンネルが、できて、いつでも気がるに、外国へ行けるように、なっているかもしれない。空飛ぶ自動車で、会社や、学校へ行っているかもしれない。タイムマシンで、未来に行ったり、かこに行けたりするようなことも、できるように、なっているかもしれない。そして、動物たちと話が、できたり、花を好きなときにさかせるような、たのしいことも、できるように、なるだろう。でも反対に、おそろしいこともおこるかも、しれない。各国で戦争をやって、原子ばくだんなどで、たくさんの国が、なくなっているかもしれない。そして多くの人々が、死んで地球の人口いまより少なくなっているかもしれない。でも私は、いつまでも楽しく平和な地球でいてほしいと思う。

一

私と兄

九六八（昭和４３）年度

私は兄のことを「武ちゃん。」とよびます。

私が小さい時から、おかあさんが「武ちゃん。」とよんでいたから私がまねをしたのかもしれません。どこの家でも兄がいれば、「おにいさん。」とよんでいます。だから私も「おにいさん。」とよびたいのですが、はずかしくて、どうも言えません。このままで大人になるのはいやだから、ある日、思いきって、

「おにいさん。」と大きな声でどなって、ふとんの中にかくれてしまいました。ふとんの中できいていると、「兄きでいいよ。」と、はずかしそうにいいました。そおっと、兄の顔を見たら、ほっぺたがうす赤くなっていました。

その日のねごころは最高でした。

それからは、「兄き。」とよぶようにしましたが、あわてている時は、やはり「武ちゃん。」でした。でも、少しずつ「兄き。」とよべるようにしたいと思います。

私と兄は、よくけんかもやります。

少しのことでおこる兄をみているとはらがたちます。けんかの結果はいつも私が負けます。兄は男のくせに口げんかがすごくうまいのです。私は兄のおこることばをきくと、むしょうにはらがたち、くやしくなり、涙がポロポロでてしまいます。でも、そのままではひっこみません。とっくみ合いで私は兄の毛をひっぱり、兄は私の毛をひっぱります。私はなくと強くなるのですが、いたいのはしかたがありません。とうとう、私の負けです。

私は、おかあさんになぐさめてもらいにいきます。「おかあさーん。」と私がいうと、兄は私をばかにしたようなわらい方をします。

「いっしし。」とわらいます。私も負けずに、「べえー。」と舌を出して、いそいでかいだんをおり、顔を洗います。泣いた顔じゃ、みっともないからです。

でも、あとで考えると私がわるかったような感じがします。でも、けんかするほど、仲

がよいというから、けんかもいっぱいしたいと思います。

兄に遊びについてもらった時もあります。それは、ローラースケート場です。つれていってもらったといっても私がちゃんとお金を出しました。バスに乗っている時、私が、「すべれるの。」とわらっていうと、兄は、わらいながら、「すべれるさ。」といいました。でも、ローラースケート場にいって、兄がすべっている所を拝見したら、あまりよくすべれません。私は兄のそばにいって、「すべれないじゃない。」といったら、兄は私の方を向いてあやしげな目をしました。そんなことをいっている私も、ほんとうはよくすべれません。

こういうことを思い出してみると、兄はやさしい兄だと思います。これからも、私と兄は仲良くくらしていきたいと思います。

雲

空の上に　雲がうかんでいる、。
フワフワと　うんでいる。
まるで　ワタのように。
雲って　毎日毎日、楽しく泳いでいる。
入道雲はムクムクおこっている。
ほそ長い　長方形、
三角形、六角形にもみえる。
わたみたいな雲で
フトンをつくったら　あたたかいかな。

一

一九六九（昭和４４）年度
一年間をふりかえって見て
一九七〇（昭和４５）年度
きょ年の冬休みの時には「もうじき六年生だな」と思っていた。その私たちも、いまでは、「もうじき中学生」だなと思うようになった。一年間がすぎるのは、なんだか、すごく早いように感じる。いろいろなことが思い

出になってのこっている。中でも五年生の三学期か六年生の一学期に、ほかの学校とやった、“学級交流会”六年生の二学期に転校生をよんでやった“友だちの集い”このふたつは、私がおとなになっても、わすれないことだろうと思う。

“学級交流会”の時は、班長女四人男四人合計八人で東あずま小学校へいってひらいた。私たちのほかに一寺小学校も参加していた。でもこの時は、八人しか参加できなかったので、ざんねんだと思う。いろいろな人たちと自分たちの学校のことを話したり解決できない問題を話しあっていろいろ勉強になったと思う。

“友だちの集い”の時は転校生に久しぶりにあったり話をしたりして、よかったと思う。

また、交流会をひらいていろいろ勉強したいと思う。

この一年間はほんとうによかったと思う。

一

電車の中で

九七一（昭和４６）年度

私は最上級生ですが、長いようで短かかった六年間をすごしてきて、どんなことがあったでしょう。六年生になってから最上級生としてはずかしくない行ないをしたかしら。そのようなことを考えているうちに、あの電車のなかでのできごとが思い出されました。

混雑した電車の中でおじいさんがぼうにすがるように立っていました。私はすぐに、

「ああ席をゆずらなくては……。」と思いましたができません。心のどこかで「おじいさんなんかに席をゆずるよりこのまますわっている方が楽でいいわ。ゆずることなんかやめなさい。」というような声が聞こえます。でも、もう一方のすみでは「早くゆずりなさい。ゆずりなさい。」と言うのです。どうしようかとしばらくまよっていると、となりにすわっていた四十才前後の女の人があわてて席をゆずりました。私はしゅん間はっとしてその女の

人を見ました。先をこされてしまったのです。そのおじいさんに席をゆずろうと考えていた人は私だけではなかったのでした。

おじいさんは。「ありがとうございます。」と何度も何度もていねいに頭をさげてその席にすわりました。私は、くやしさとうれしさとのまじり合ったふくざつな気持でその様子を見ていました。先をこされたことはくやしかったのですが、おじいさんのうれしそうな顔や、後かいをしていない女の人の顔を見ると、私が席をゆずったようになにかすがすがしい気分になれたのです。

電車の中ではこのようなおじいさんをよく見かけますが、席をゆずるということはなかなかできないことだと思いました。また、よいことははたでみていても気もちがいいとも思いました。これからは電車の中でこのようなことに出合ったら、少しもまよわず、席をゆずろうと思います。

一九七二（昭和４７）年度

一　直木先生について

六年生になって、受け持ちになった直木先生は、すごくおもしろくって、いい先生です。

直木先生は、そうじがすきで、いつも、そうじの時間になるとつだってくれます。

だけど、直木先生は、授業の時は、すごくまじめで、きびしくやってくれます。

だけど、わからないことがあると、おしえてくれることがあります。

私は、こんな先生が、受け持ちになってよかったと心の中で思っています。

作文

一九七四（昭和４９）年度

作文とか、感想文は、ぼくは大にがてだ。

作文を書いたとしても、いつも一枚以下だ。

二枚以上は、あまり書いた時がない。なんでもっと、たくさん書かないかと、ときどき思

う。三、四年の時には、たくさん書けたんだけど、五、六年になってからは、あまり書けなくなってしまった。ぼくは、いつもむずかしく考えすぎて、時間がきて書けなくなってしまう。だから、こんどはむずかしく考えないで、簡単に書こうとする。そうすると、こんどはみじかすぎて、三ぎょうくらいになってしまう。でもぼくは自分で文を長くしようと思えば、長くできるんだけど、長く書いても、すじの通った文でなければ、書いてもしかたがない。だからぼくの作文はいつも、みじかくなってしまう。

一九七五（昭和５０）年度

五月七日（水）　晴れ

今日はまちにまった小運動会だ。

きのうは、雨で中止だったが、今日は晴ればれとしたいい天気だ。

騎馬戦は、ひきわけだったが、最後にはあ

かがまけてしまった。でもまけても「ああよかった。」と思った。だって白組に友だちがいるから、まけてもかっても同じだと思った。

一九七六（昭和５１）年度

二月二十二日（火）晴

きのうから、「私にとって木下川小学校とは」という作文がでていた。家でさっそく始めたが、むずかしいのでなかなか思い浮かんでこない。書きだしができると、つぎの段落に何を書いていいのかわからない。時間がたつだけでぜんぜん進まなかった。一日で、原こう用紙三枚ていどの作文を書くことも容易なことではない。

一

九七七（昭和５２）年度

九月三日（土）晴

半沢君の家で少し遊んでから、水門へ行くことにした。水門の近くにきて、急に自転車のチェーンがはずれてしまった。みんな気にもとめずに、どんどんさきにいってしまった。まったくつめたい友達だなあと思った。必死でなおして、やっとみんなのいるところに来た。だいぶ水が、引いていた。半沢君と細井君とで、たくさんゴカイをとった。帰るときに赤いものがヒラヒラしているので、田辺君がすくってみると、ランチュウだった。中三の、のりたんが「育てれば、一万円ぐらいするぞ」と言った。家に帰ってから田辺君が、金魚屋さんに売りにいくというので、ぼくもつき合ってあげた。金魚屋さんは、あっさりと「だめ」といった。結局、買ってもらえなかった。

一九七八（昭和５３）年度

二月十二日　月曜日

お昼ちょっと前から、クッキーを作り始めた。

ほんの二，三時間でできると思ったらまだまだ。やっとバニラ生地ができた所。これきっと夜まで、かかっちゃうなーなんて思って作っていた。

やっとできた、何時かななんて思って、時計を見たらなんと六時。ウソみたい。今日やくの大変だから、明日やこう。

一

「一月一日」

昭和五十五年の五分前になった一分一分たっていった。こんどは五秒前になった一秒一秒たつうちに、新しい年がもうすぐそこにいるんだなあと思った。三、二、一ボーンボーン昭和五十五年の新しい年が生まれた。家族ぜんいんで明けましておめでとうと言いあっ

た。そして浅草におまいりに行った。それから遊んで帰りは朝の六時に帰った。初ゆめをみたいと思ってねた。

一九八〇（昭和５５）年度

四月十八日

今日、中村のおわかれ会をやった。さいしょ、フルーツバスケットで、すごく楽しかった。おくる言葉を歌った時、涙がこぼれそうになった。中村君もわかっていたはずなのに、と中でうたえなくなってしまった。「涙かれるまでなくほうがいい」というところで、ほんとに涙がこぼれてしまった。すぐにふいてうたった。おわってから二人で帰ってぼくの家ですこしあそんだ。これがさいごだ。またあう日までさようなら。

一九八一（昭和５６）年度

私の生まれた所

私が生まれた時、お父さんは大学にいって

いたそうです。生まれて、学校に電話がはいり、お父さんは、急いで病院にかけつけたらしいです。私が、誕生したのは、昭和４４年１０月１１日の午前７時ごろ「オギャー」という声がきこえたのだそうです。男の子ったら宗一（むねかず）、女の子だったら糸乃（しの）につけようと思っていたそうです。生まれてきた子は、女の子、糸乃というなまえになったのです。糸乃の糸というじは、お母さんの字をとって乃という字は、日本古来の女性のイメージ、思いやりがあってやさしい女の子になってほしいとねがってつけたのだそうです。実際には、おてんばで、かみのけはみじかくて、男っぽいんだけれども私が赤ちゃんの時海へ行って、すな浜のところであそんでいたら、

「男の子がビキニきている」

といわれたんだそうです。あとでその話をきいて、私は、プンプンしていました。今、アルバムをみるとおまんじゅうみたいにプクプ

クふとっていて、自分でも本当にこれが私なのかなーとおもうくらいです。

一九八二（昭和５７）年度

二月二十四日（木）

兄さんにたのまれて、オートバイのプラモデルを買いに行った。だけど、行くと中で、ブレーキのワイヤーがきれたので、行きだけで十五分もかかってしまいました。プラモ屋にようやく着いて、また、さがすのに三十分ぐらいかかってしまった。で、結局、ありませんでした。しかたないので、戦車のプラモを買って帰りました。家について、兄さんに見せると、

「バカー、なんでこんなもん買ってきたんだ。」

「だって、バイクがなかったら、戦車かってこいって言っただろう。」

兄さんはそのプラモが気に入らなかったらしく、ぼくにくれました。もうけもうけ。

一

一九八三（昭和５８）年度

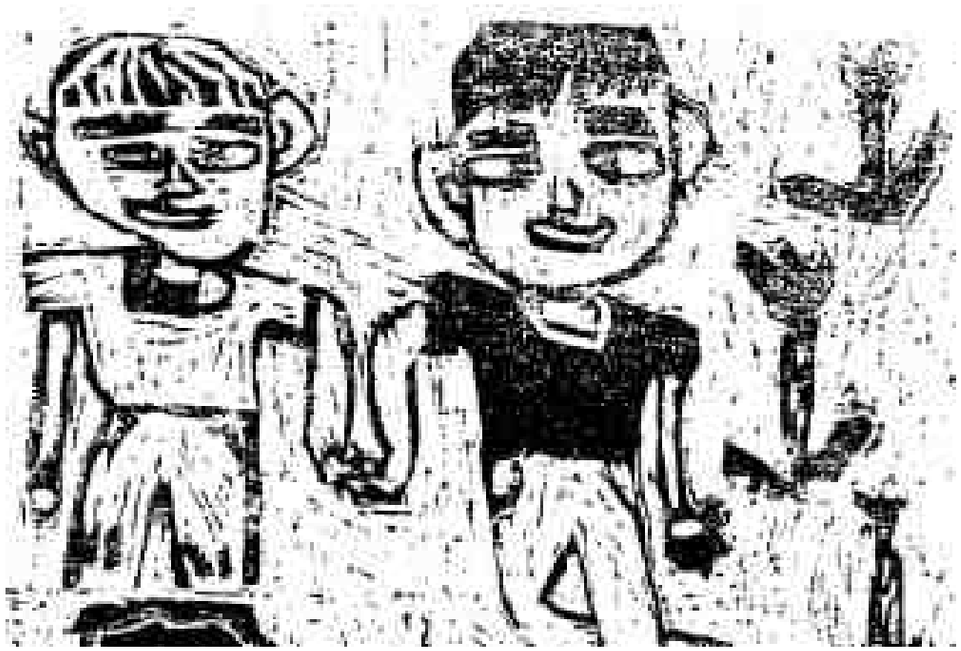
一月二十日（土）

今日は、いつになく大雪でした。東京では、八年ぶりの、大雪だそうです。ぼくは、東京で雪が降るのはめずらしいので、とてもうれしいけど、大人達は、雪が降ると、寒くなったり、転びやすくなるので、めいわくがっていました。

学校は、一面真っ白でした。銀世界というのは、こういうのなんだなあと思いました。

みんなで、雪合戦をしたり、雪だるまを作ったりしました。ぼくはまさか、東京で雪だるまが、つくれるとは思いませんでした。

また、あしたも雪が残っていたらいいなあ。



一

九八四（昭和５９）年度

二月二日（土）

今日は三輪田学園の発表日。大妻のテストが終ってから靖国神社へお参りに行きました。母が「落ちてもしょうがないよ。別におこらないから。」と私に言いました。「うん。」と答えたけれど、「どうしよう。落ちたらどうしよう。」このことばしか私の頭にはありません でした。

もうすぐ発表の四時なので学校へ向かいました。なみこがいました。今ちょうど張り出したところでした。まだ四時前で発表会場へは入れないので、肩の高さぐらいの花壇にとびのって遠くから見ました。なみこの九番は読み取れたのに、私の十三番が見えません。もう一度見ました。「あれ、私の番号もあるみたい」と思って先生に言うと、「よかった な、本当によかった。よくやったぞ！！」と先生は言ってくれました。四時を過ぎたので会場へ行って見ました。私の番号もなみこの

も、他の友達のものっていました。

帰り道、泣きながら「今日から日記書こう。」と大声でいったら、なみこのおばさんが笑っていました。

一

三月二日（日）

この前、学校から帰ると、母がふとんの中でねていました。私はどうしたのかなと思いました。母は小声で、「熱がでちゃってね。今日夜ご飯作ってくれる。」と言ったので、作りました。母がねこんでも、姉がいたので、いつもは、そんな大変じゃありませんでした。でも、土、日と、スキーにいってしまい、その間、私は、小さなお母さんです。こんなこと初めてでした。土曜日は、とうぜん学校があります。いつも朝、洗たくをするのですが、一日おきで、今日は洗たくの日ではなかったので良かったのです。学校には間にあいました。その日はもう、てんてこまいでした。日

曜日。母の熱は下がり、へい熱になりました。でも、無理をして、またかぜがぶり返すといけないので、あと一日、ゆっくりしてもらうことにしました。でも、お母さんの仕事というのは、やってもやってもやっても終わりません。これで、洋さいの仕事もやっているなんて、すごいなあと思いました。でも、母が一人いないのと、私一人いないのとでは、ずいぶんちがうなあと思いました。母という人は、弱そうで強いんだなあと、感じました。姉が出かけていたおかげで、とってもいい勉強になりました。

一九八六（昭和６１）年度

二月一日（日）

上野の美術館で、高風会書道学生展に私の書きぞめも出品しているので、お母さんと見に行きました。私が見つからなくてあせってしまいました。ふと、考えたのは、「もしかして、私の作品は、出ていないのではない

か。」と言うことです。心配なので、お母さんに聞くと、「そんなことないよ。絶対にあるから。」と言ってくれたので、安心しました。それでも、自分の作品が見つかるまでは、なんとなくおちつかなかったです。

見つかった時は、ほっとしました。思わずもう一回名前を見なおしてしまいました。ふだを見たら、準特選と書いてあったのでおどろいてしまいました。初めて出したのに夢みたいで、とってもうれしかったです。

他の作品も、大きく書けていました。特に印象にのこったのは、四才の子が書いた字です。とっても力強かったです。

これからは、、、もっともっといい字を書きたいと思います。

一九八七（昭和６２）年度

二月三日（水）

私たち、六年生はもうすぐ中学生になります。

私は、中学になるのを楽しみにしています。それは、新しい、友だちができることです。それに、クラブがあります。私は、まだ何に入るか決まっていません。なぜなら入りたいクラブがいっぱいあるからです。

私たちが中学になるのは、四月からです。でも私は今からドキドキしています。それに夢でもときどき見ます。でも、中学になるのは、ちょっと恐い気もします。それは、いじめです。私たち木下川小学校は人数が少ないので、他の小学校の人たちから、何か悪口を言われるかもしれないと心配しています。

勉強、私が心配しているもう一つは、勉強です。

「中学に行くと、人数が多く、勉強で競争するようになる。がんばらないと、他の学校の子に負けてしまうよ。」といつも言われます。だから、他の学校の子にも負けないようにがんばりたいと思います。

もうすぐ、中学。中学に行ったら、新しい

友達をつくって、楽しく中学校生活を送りたいし、勉強やクラブも、一生けんめいがんばりたいです。

一九八八（昭和６３）年度

一月二十八日（土）

今日、まちにまったたこ上げ大会です。このたこはつくるのにけっこう大変でした。でも今日そのたこがどんなうんめいになるかは思いもつきませんでした。その日はとても風が強くすごいたこあげびよりでした。走らなくてもすぐに上がりました。だがその風がわざわいしました。上がってもすぐ落ちてまた上がりました。落ちてのくり返しでした。そしてたこに近づいて調べてみるとたこのはしが切れていました。どうしようと思い先生方の所に行こうと思い糸を全部まこうとしたらふわっとたこが二、三十センチ上がりくるくるまわり始めました。あわててたこがまわるのを止めようとつかみました。もうその時す

でにおそくたこがぼろぼろになっていました。ぼくはその時こう思いました。今日これからぼくはせけん話に花をさかせようとおもいました。そう思ったときは、かいし5、6分のときでした。みんなにたこをみせにいったときみんなのもこわれていました。今日はたこ壊し大会だと思いました。

六月十日（土）一九八九（平成1）年度

今日は、青木君の家で遊びました。二人で遊んでいると、「遊べる」と声がしました。だれかなあと思ってふりむくとそこには大井君がいました。ぼくたちは正直言って大井君とは仲が悪く遊んだことがほとんどありませんでした。だから、青木君と二人しておどろいてしまいました。けれど、その場はふつうに遊べました。自分で言うのもなんだけれど、

普通に遊べたのでとてもよかったなあと思います。前のぼくたちだったら、たぶん遊んでいなかったと思います。本当に、ぼくたち変わったなあなんて思ってしまいました。

これからも、大井君だから遊ばないとかそういうことにはならないようにしたいと思います。今だから言えるけれど、大井君には悪いことをしたなあと反省しています。

一月十七日（木）

今日は、十二年目の私の誕生日です。

おばあちゃんには、前からほしかったKENZOの財布を買ってもらいました。お母さんは、ケーキだと食べたらなくなるからと言って、三千円で「たま」の『ひるね』というCDを買ってくれました。お父さんは、私の自転車が荒川で盗まれたので、倉庫にあった自転車を出して、こわれたところを直して、

かごとライトと鍵を買ってつけてくれました。

十二年間の月日があっと言う間に過ぎ去りました。何年前かのあの日、幼稚園だったころのあの姿は、もう二度ともどれない。十二年前の一月十七日。私は、さか子で生まれた。みんなにかわいがってもらい、十二年間生きてきた。小学校生活ももう終わりです。

十二年間育てて、ありがとう。私の誕生日を祝ってくれて、ありがとう。あと何年くるかわからないけど、一年に一度しか来ない誕生日。大人になっても、二十一世紀になっても、一年ごとの年を大切に生きていこう。私は、こう心に決めて、これからを生きていく。

キャンプのこと

一九九一（平成３）年度

８月２３日はキャンプで健康学園に行った。行く時は、バスにのってからぼくはおかしを食べ始めました。そして３時間くらいして、

いなげの大プールに着いた。そして着替えてから、シャワーをあびてからプールに入った。まず、でっかいすべり台にのった。A、B、C、コースがあってどれもたのしかった。すべり台の次は流れるプールであそんだ。そしてふかさ2mぐらいのプールで良樹のオレンジ色のぼうしがなくなっていっしょにさがしに行った。でもみつからなかった。そして昼ごはんはカツ丼だった。けっこうまかった。そして健康学園について、荷物整理をしてからプールに入った。そしておふろに入った。ごはんまで時間があったから1年の米山とまさるとかけっこした。そしてめしくってからキャンプファイヤーをした。そしておれとみのりと大地で営火たいをやった。いっぱいもえた。そしてフォークダンスをした。歌も歌った。そして学園にもどった。ねようとしたけどねれなくてまどからおかしをもって女とあそんだ。そして大塚先生が見回りに来たからベッドにかくれた。そして自分のベッドに

もどってねました。

二日目になった。ごはんを食べて海に行った。３０分ぐらいおよいでたら出ろってゆう合図がした。すいかわりをした。見てて楽しかったけどいざ自分でやってみるとうまくいかないでもすいかがおいしかった。帰る時ムカデがつぶれてた。たぶん行く時いたムカデだと思う。夜はレクレーションと百物語をした。中学生が言った。レクレーションは水の中のいきどめとかあきかんつみをした。たのしかった。その次の日はおみやげを買った。ちょうちんとクッキーをかった。そしてハンバーガーとフランクフルトをかった。そしてフェリーにのった。２０分ぐらいたってやっと動いた。そして風でぼうしがとばされたけどだいじょうぶだった。そして残りのお金はフェリーの中の売店でつかった。そしてバスにのった。ギュウギュウづめだった。そして電車にのって荒川えきでヤングクラブの人の車で先にもっていっといてもらった荷物をもって帰った。

まりえをはげましてあげたいなぁ

一九九二（平成４）年度

六月二十二日（月）

今日、きくおか先生の話で、まりえのことで何かゆおうとしたから、

「まりえのお父さんが、のうしになったんでしょ。」

と言ったら、

「うん。」

と言って、言いだしました。

「まりえちゃんのお父さん、なくなったんだ。」

と言って、ぼくはおどろきました。

まりえは、だいたいわかっていたのに、よくがんばったなあとおもいました。学こうにきたとき、はげましてあげたいなぁとおもいました。

野球のおたのしみ会

一九九三（平成５）年度

ぼくが入っているファイターズの年に一回のおたのしみ会をやりました。ぼくはもう、ファイターズのユニフォームを着るのがさいごでした。これは、おたのしみ会でもあるし、お別れ会でもありました。ぼくは、ファイターズでやるのが最後なので楽しくやりたいと思いました。さいしょの試合がもとファイターズにいたＯＢのせんぱいと試合をやりました。今日は、おたのしみ会なのでほんとの試合だと、かんとくがだじゅんとかしゅびとかを決めるんだけど、ぼくがだじゅんとかを決めました。ぼくは、ピッチャーをやらないで、ＯＢの人とかは、いまでも野球やってる人ばっかりだから、遠くに飛ばすので、ぼくは、レフトをまもりました。いつもは、ぼくがずっと投げて、今日は久しぶりに、５年生の子に投げさせました。中学でいつもはやいボールを打っているから小学生のボールはおそ

くてみんなほとんど打てませんでした。手かげんしてくれたけど勝ってうれしかったです。ぼくは、最後のおたのしみ会で楽しくできたと思いました。

木下川の町

一九九四（平成６）年度

去年の十月か、十一月頃、ぼくのお母さんのお兄さん、つまり、ぼくのおじさんの家の皮工場がなくなってしまいました。工場がなくなってしまったのはなぜかというと

「今の日本人は大学を出て、皮工場に来る人はいないから、働く人がどんどんいなくなる。早目に手を引いておけ。」

と、亡くなってしまう前に社長のおじいちゃんが、そう言ったそうです。

いつもおじいちゃんの家に行けば、ゴオーゴオーと鳴っていたのに、今行けばとっても静かでいつも使われていたタイコがなくなっていて、駐車場になっていました。なんだか、

とってもさみしい気がしました。

今、まだ木下川には、皮工場が残っていますが、ほとんど働いている人は、日本人も少しは働いていますが、どこから来ているかはわかりませんが、外国の人ばかりが働いています。

今は日本のように産業や文化が発達している国より、まだ産業や文化が発展していない国で、皮工場を開いていた方が、安く手に入るので、今の日本は、皮屋がなくなっています。

ぼくのおじさんの家で、前まで働いていた人の、就職先は、おじさんが、ちゃんと見つけてくれたそうです。そういう部分では、よかったなあと思いましたが、皮工場がなくなってしまったのは、とっても残念でした。

多分、これからも皮工場は、増えていくことなくこれからもどんどん減ってきてしまうのではないかと思います。

でも日本人には、皮工場をおいておく必要

があると思います。いつ日本と外国との交流がくずれて、輸入すれば手に入るのが、手に入らなくなってしまうことがないとも限りません。きたない、疲れるからといってなくしてしまうわけにはいかないと思います。日本には皮屋は必要だから、木下川に残していきたいです。

友達について

一九九五（平成７）年度

最近、左手の人さし指をけがした。でも、痛くてもがまんしたら。友達や病院の先生にはげましの言葉を言われたからだ。どんなにつらくても、はげましてくれる人がいるからすぐ治る。痛いマッサージでも友達の言葉を思いだして治す努力もした。

ぼくは、やさしい友達に囲まれて幸せだなあと、つくづく思う。これからも仲よくしていこうと思った。

今までやさしくしてくれた友達に、ぼくも、

やさしくしようと思いました。

人を差別するのも絶対に止めようと思います。口だけじゃなく他の人にもわかるように努力します。

悪いことだけじゃなく楽しいこともたくさんありました。中川小学校から木下川小学校に転校して来た時初めはドキドキしていたけれど、すぐ友達ができました、木下川小学校は一年生から六年生まで、みんな混ざって遊んでいて、すごいなぁと思った。そのおかげで今では、低学年とも遊ぶようになりました。

栗野に行った時は、みんなとさらに仲よくなりました。転校して来たムーチョ（中村君）とも仲よくなり、毎日が楽しくなりました。前は、友達に声をかけるだけでもすごいはずかしかったけれど自分はだんだん成長したなぁと思いました。

はずかしがりやだったぼくを成長させてくれたのは、ぼく自身の成長だけじゃないと思います。友達や先生や家族などがぼくをこ

まで成長させてくれたんだと思います。これからも、友達と仲よくしていきたいと思います。

自分の夢

一九九六（平成８）年度

ぼくの夢は、本を書く人になることです。ぼくの家は本が少ないけど、すごくおもしろい物とかあって、自分もそういうのをかけたらいいと思います。

ぼくがすきな本は、推理小説です。名探偵が登場したりして、すごくおもしろいのです。そのために本をたくさん読んでおきたいです。

そして、自分が書いた物語が本になったらいいなあと思います。本にならなくても、いっしょうけんめいがんばりたいです。

木下川の町

一九九七（平成９）年度

私が住んでいる町は、皮工場が多い町です。

昔から皮工場が多い町です。私は生まれたときからこの町木下川に住んでいます。私が生まれた時は、皮工場が今より多かったです。しかし、何年もたつと、辺りがどんどん変わってきました。今、皮工場が少しずつ減ってきています。

木下川は皮の町なのに、皮工場がなくなってしまったらどうなってしまうんでしょうか。だから将来は私は、皮工場を増やしたほうがいいと思います。そして木下川を皮の町にして、いい皮をつくってもらいたいです。

私は生まれたときから、この町に住んでいるから皮工場のことは知っています。皮工場は、木下川の町のシンボルだと思います。私が大人になるまで皮工場が残っていたらいいなぁと思っています。

そしてほかの人達にも皮工場の歴史をわかってもらいたいです。そして皮工場のよさを知ってもらい、皮工場を増やしたいです。木下川は工場が多いから公害もすごいと思いま

す。

私は、ほかの地域みたいに、自然を増やそうとしないのかなぁと思います。自然があれば公害も少なくなるんじゃないかなぁと思います。そして公害もない住みよい町にしたいなぁと思います。小さな土地でもいいから緑を増やしていったほうがいいと思います。

今、家の近くに清掃工場があります。毎日のように煙が出ています。私は、清掃工場などができるから公害や自然破壊などがおきるんじゃないかなぁと思います。だからゴミをリサイクルしたりしてゴミを減らしたり、車にあまり乗らないなどの対策をして、動物や植物や人間が住める町にしたいです。

私は大変でもいいから木下川の町の工業を盛んにしほかの人達との交流を深め、一人一人の個性あふれている木下川の町にしたいです。私はこの町にだれでも利用できる施設をつくってほしいと思っています。老人ホームをつくってもらいたいです。高齢化社会の今、

老人ホームがあればおじいちゃん、おばあちゃん達が楽にくらせるからです。大人になっても木下川の町に住んでいたいです。

一九九八（平成１０）年度

人間ＶＳ（バーサス）自動車

十一月十一日（水）

いつも通り学校が終わり、家に帰りました。それで岩ちゃんと手倉森（兄）をうらの公園で待たせていたので、早く行こうと思ってランドセルをしょったまま自転車に乗って行きました。それで、通りに出ようとしたら、ちょうど車が来ました。あぶない‼と思ったが、おそし、ドーンッ‼×１００タッ。「だいじょうぶか。」と運転していた人が。「哲ッッ。」と会社の人が言って、みんなワイワイ集まってきました。一しゅんで、ボーッとしていました。「だいじょうぶか。頭打ってないか。」と会社の人が言いました。

（うわぁ、車にはねられるっていうのは、

おそろしいな）と、会社の人に聞かれているのに、ほかのことを考えていました。けど

「うん…別に、頭は打ってない。いたいのは、足だけだから、だいじょうぶ。」と言いました。それで、本当にたいしたことなくて、自分で立ち上がって、少し落ち着いて（岩ちゃんたちが待ってるから、ずっと待たせるのは悪いから、行って事情をつたえよう）と思って、公園に行きました。

それで「いやあ、今、車にはねられちゃったよ。」で岩ちゃんが「だっせぇ、プッ。」と言われました。まあたしかに気づいてなかったみたいで、ぼくが何事もなかったように言ったからかもしれないけど、（そりゃねぇでしょ、そんな言い方は）と思いました。それで「だから、遊べなくなっちゃったから、じゃあ。」と言って、もどってきました。そして、良友おじちゃんに連れて行ってもらい、病院へ行きました。行く途中、（ああ、自転車がこわれたなぁ。これであのボロくていやな自

転車とお別れだ。新しい自転車になるな。あと、日記の材料ができたな。いやあ、一石二鳥だなあ。あっ、けど、自分もケガして大損だからただの一石（な）とか、とにかくすごいくだらないことを考えていました。それで、病院でレントゲンをとりました。

「骨にいじょうはないけど、内出血してるから、明日がいたさのピークだと思いますね。青タンでふくらんで、血がはだにうき出てくるね。」と言われました。

（うわぁ、なんかそういうふうに言われると、すごいやだな）と思いました。そして、家にもどりました。今日はある意味、いい教訓になったなと思いました。

一九九九（平成１１）年度

十二月四日（名前の感想）

大輝君の名前もちょっといいなと思いました。だってたくましく生きていくっていいと思うし、輝くのもいいなぁと思いました。英

知君の名前もりっぱになってという願いをこめて、この名前にしたんだと思います。明菜ちゃんの明るい人になってほしいと思って名前にしたと思います。明るいってぼくは好きだと思います。真由美ちゃんは美しく真っすぐ進んでいくという、真っすぐ進むっていいなぁと思いました。

みんなの名前は願いやこういう人になってほしいとか、正しく生きてほしいという意味だと思いました。だから自分の名前や友だちの名前もすごくいいなと思いました。自分の親がつけた名前は自慢です。

二

おばあちゃん

私のおばあちゃんは六十八才です。学校から帰ってくるといつも洗濯物を取り込んで、たたんでいます。その後、買い物に行って、私たちの夕飯の準備をします。いつも大変だなと、私は思っています。うちは親が両方と

も働いているので、家のことは全部おばあちゃんが一人でやります。弟の迎えも一人でやっています。

私はよくおばあちゃんとけんかをします。この間も私は教科書をなくしてしまって、おばあちゃんに「どこにおいたの。」と聞いたら、「机の上だよ。」と言ったので探しに行きました。でもその場所にないので、つい「おばあちゃんなんか、頼りにならない。」とひどいことを言ってしまいました。

学校に行く途中、私の言ったことが頭の中にひびいて、「何で、あんなことを言ってしまったんだろう。わたしもいやな気持ちだけれど、おばあちゃんはもっといやな気持ちなんだろうな。」と思いました。でも学校から帰ってきたら、おばあちゃんはいつも通りに、接してくれました。その時は、「何でおこっていないんだろう。」と不思議に思いました。教科書をなくしたことをおばあちゃんのせいにしたのに、どうして許してくれるんだろう。

わたしだったら絶対に許さないと思います。これからはあんなひどいことは絶対に言わないとおばあちゃんに心から謝りました。

おばあちゃんは私や大輔のことを嫌いだと言っているけど、本当は違うんだと思います。だって、いつも仏だんの前で手を合わせて、「子ども達の安全を守ってください。」と口にしているからです。初めてその言葉を聞いたときは、心からうれしく思いました。

私はおばあちゃんが大好きです。文句を言い合ったり、けんかもしたりするけど好きです。これからは文句を言ったり、けんかをしたりしないように努力したいです。そして、これからもおばあちゃんと仲良くしていけるようにがんばりたいです。いろいろ手伝いをしたり、買い物に行ったり、できることはなるべくやるようにしたいです。そして、ちょっとずつでもいいから、おばあちゃんともっと仲良くしたいです。

二〇〇一（平成１３）年度

しあわせだったひとときこれは、ぼくが前にも見たことがある夢で、お兄ちゃんといっしょにふろに入ったら、バチバチっと音がしてから、ふろが変わって、タイムワープしていた。

服を着て出たら、なーんかなつかしくて、歩いていたら、男の子が二人ねていた。そいたら、「ほら、二人ともねなさい。」という男の人の声がした。これも聞きおぼえのある声だった。とりあえず、ねた。

それで、朝起きて、まどから外を見た。やっぱりそうだった。むかしの、うちんちだった。下に行ったら、ママもいた。パパもお兄ちゃんも、オレもいた。小さいときのオレがいた。とてもしあわせそうだった。泣いた。それで、パパとママを呼んで、全部話した。幼稚園のとき、ママとパパが離婚したことも、そして、一九九九年九月、パパが死んでしまうことも・・・。そのあと、ぼくが苦しんだ

ことや、思ったこと、パパといっしょに死にたいと思ったこともいっぱい。全部すべて言った。それで、泣きまくった。

それで、帰ることになって、ふろに行った。バチバチしなかった。それで、朝ごはんを食べた。しあわせだった。そしたら、バチバチした。もとにもどっていた。でも、帰りたくなかった。パパもママも、お兄ちゃんもオレもいたから。離婚したあと、パパとけんかして、（パパなんか死んじゃえ）と思っても、みんなみんな実さいに死んだら、かなしいのだろう・・・。

日記と作文から

二〇〇二（平成１４）年度

八月十六日　将門祭りのこと

十五日の夜、お母さんと私と茨城のお祖母ちゃんの三人で、石下駅の近くのお祭りに行きました。七時から始まるので、近くのお店で買い物をしてから行きました。お祭りは、

普通はいつも十六日なのに、今年は十五日でした。

茨城のお祖父ちゃんは脳梗塞になる前は、車に乗って毎年行ってたけど、お祖父ちゃんが脳梗塞になってから、お祭りには行っていないと言っていました。でも、今年は、お祖父ちゃんが「三人で行っておいで。」と言ったので、農道を通って、橋を渡って、お祭りを見に行きました。

その時、お祖母ちゃんが、「今日行くお祭りは、『将門祭り』って言うんだよ。」と言ったので、「『将門』って誰」とお母さんに聞いたら、「平将門っていう武将だよ。将門が日本橋の方まで飛んでいったという伝説があるんだよ。」と言いました。

そしたら、花火がドドーンと上がって、お祭りが始まりました。それで、大判焼きと焼きそばを買って、少し休んでから、タクシーで帰りました。その夜、雷が鳴りました。

「将門祭りがあった夜は必ず雷が鳴るんだ

よ。」と、お祖母ちゃんが言いました。

私は、将門の事について、社会科で調べてみたいです。

十月二日　朝鮮学校との合同学習

三、四時間目に朝鮮学校の子と一緒に合同で、縄文ポシェットを作りました。朝鮮学校に着いて、教室の前で待っていたら、朝鮮学校の女の子から何枚か手紙をもらいました、四人の女の子に縄文ポシェットを教えていたのですが、一人の子ばかりに教えていました。

最初の編み方を教える時は、黒板を見ながら教えました。底の模様作りと、ひも通しが難しかったみたいでした。一人の女の子が、「これでいいですか。」と聞いてきたので、「うん、いいよ。」と言いました。私たちが帰るとき、女の子二人がずっと手を振っていました。また朝鮮学校の子と合同学習できる日がたのしみです。

十月十三日　運動会

今日は、本番の運動会でした。大玉送りで、

私が一番大変だったのは、大玉にあまりさわれなく、追いかけるのが大変でした。騎馬戦では、初めての競技でしたが、馬を作って人を乗せるのと、整列が上手にできてよかったです。太鼓も少しまちがえましたが、上手にできたし、持久走では四位でしたが、無事二キロ完走できてよかったです。運動会の中で一番緊張したのは、「閉会のことば」でした。良い経験になったし、小学校最後の運動会なので良い思い出になりました。